



TITLE:

京大広報 No. 389

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 389. 京大広報 1990, 389: 901-918

ISSUE DATE:

1990-04-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209288>

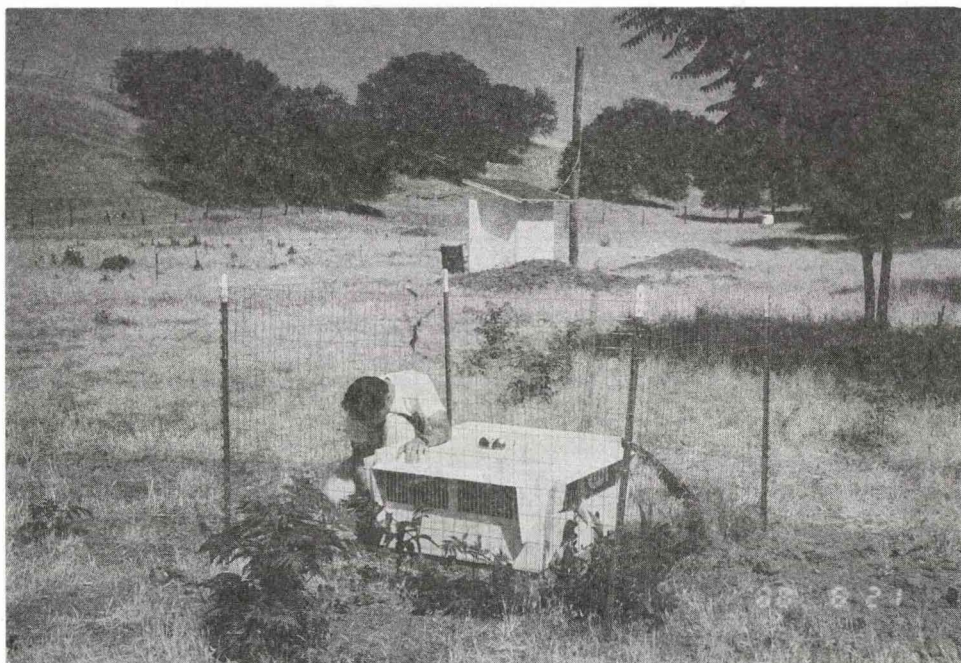
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 389

京都大学広報委員会



防災研究所附属都市施設耐震システム研究センターの国際研究協力
(カリフォルニア州パークフィールドにおける日米共同地震観測)
—関連記事本文 913 ページ—

目 次

学部入学式における総長のことば		
総長 西島 安則……	902	
大学院入学式における総長のことば		
総長 西島 安則……	907	
〈大学の動き〉		
名誉教授称号授与式……	910	
医療技術短期大学部名誉教授称号授与式……	911	
平成2年度医療技術短期大学部入学式……	911	
平成2年度学部入学式……	911	
平成2年度大学院入学式……	911	
京都大学春秋講義(春季講座)の開講……	912	
〈紹介〉		
防災研究所・都市施設耐震システム 研究センター……	913	
〈資料〉		
平成元年度京都大学後援会助成金交付者……	914	
〈随想〉		
結核のこと	名誉教授 佐川弥之助……	917
〈コラム〉		
人と木との交響	山田 正……	918
日誌……		918

学部入学式における総長のことば

平成2年(1990)4月11日

総 長 西 島 安 則

諸君、入学おめでとう。

今朝は本当に素晴らしいお天気になりました。学内のくすの木もその若葉を春の光に輝かしています。ここに、歴代総長、奥田 東先生(第17代)、前田敏男先生(第18代)、岡本道雄先生(第19代)、沢田敏男先生(第20代)、そして、渡邊庸一郎先生、小堀 憲先生、満田久輝先生はじめ多数の名誉教授の先生方の御来臨を賜り、部局長の先生方、教職員の皆さまと共に、平成2年度の学部入学式を挙行しますことは、京都大学の最も大きな慶びであります。

この春は、文学部222名、教育学部68名、法学部406名、経済学部265名、理学部307名、医学部99名、薬学部89名、工学部1,048名、農学部335名、合計2,839名の新入学生諸君を迎え、また、31名の第3学年編入学者の諸君を迎えることができました。

何事も始発のときの「意志」というものが大事です。諸君は、京都大学で学ぶことを志し、努力を重ねて、本日晴れて本学に入学しました。皆さんの輝く瞳、引き緊った頬に私は京都大学学生としての始発における潑刺とした意欲としっかりとした意志を感じます。本学の学風の頼もしい担い手として、京都大学は全学をあげて諸君を心から歓迎します。

今日、この慶びの時に、これまでの長い年月、諸君の成長の一日一日を、そして勉学の一年一年を、見守り、励まし、支えて下さったご家族の皆さま、先生方、諸君の友人達、そして、諸君がお世話になった沢山の方々に、ここで、諸君と共に、改めて御礼を申し上げたいと思います。皆さま、本当に有難うございました。

諸君の入学に当り、京都大学の歴史について、少し話しておきたいと思います。京都大学は今、世界の最高水準の学問の府として、まさに、意気旺んであります。しかし、ここに至る90有余年の歴史を顧みるとき、その芯に一貫して継承されて来た本学のあり方についての意志と、その芯のまわりにあたかも年輪の如く、その時代時代の状況の中で培われ、成熟して来たこの学問の府の根幹を見ることができます。学風は決して一朝にして培われるものではありません。力強く太い幹が亭亭とそびえ、枝が大きいひろがりをもつとき、その大樹ははじめて、学風とも呼べるものをもつことができます。

諸君を迎えるに当って、諸君をこの学風の新しい担い手として、より高く、より広く、伸びひろがる本学の将来を諸君と共にする思いを込めて、この京都大学の学風について語りたいと思うのです。

この京都の吉田の地で、本学の開学式ともいふべき第一回の宣誓式(入学式)が挙行されたのは、明治30年(1897)9月13日でした。木下廣次初代総長は、次のような趣旨の訓示を述べて、本学の独自の資性、固有の特性を強調されました。

「大学生は、自重自敬、自主独立を期すべく、したがって指導にあたっては細大注入主義は採らぬところであり、自発自得の誘導に努めたい。」

この精神は93年経った今日も承継がれています。その第一回の宣誓式で名を署して入学した学生は、理工科大学の土木工学、機械工学両学科の学生53名でした。こうして、“政治の中枢から離れた学都以、自由な学問の研究を盛んにすること”を目指した新しい京都帝国大学が誕生しました。

制度の上でも、当時としては、極めて意欲的なものが考えられました。それまでただ一つあった東京帝国大学では年級制（学年制）であったのに対して、京都帝国大学では科目制（単位制）を採りました。年級毎に各科目の成績の平均点によって進級や落第を決めることはしないで、科目毎に合格を決めることにしました。従って、修学年限は、3年以上6年以内と最短と最長の在学年限を定めました。この期間に全科目の試験に合格した学生は、論文を提出して卒業試験を受けることになっていました。この制度は、“学生の人格を認め、個性を尚び、真理愛好の精神を涵養せんとの深き意”によるものであると述べられています。こうして、独自の学風を築く、第一歩が踏み出されました。

理工科大学の開設から、2年を経て、明治32年（1899）9月に法科大学と医科大学が開設され、同年の秋には、附属図書館が閲覧業務を始め、また、医科大学の附属医院（附属病院）も内科と外科の診療を開始しました。

明治39年（1906）9月に文科大学が設置され、京都帝国大学はその最初の設置計画にあった法、文、理工、医の4分科大学が揃い、総合大学としての形をやっと整えました。その当時の本学の学生数は1,195人でした。現在の学生数は学部、大学院を合わせて17,000人を越えています。

このようにして、学問の府の理想をかかげた一本の苗木はこの吉田の地に根をつけ、成長しはじめました。しかし、時代は、厳しい寒風と、暖かい日差しが交錯する近代化への途を模索する困難なときでした。

この時代の京都帝国大学の内なる自由の覇気を表現し、開かれた大学の実現に尽力された教授の一人、谷本 ^{とめり} 富 先生のことについて話しましょう。

谷本 富は慶応3年（1867）10月17日香川県に生まれました。その年は10月14日には将軍が大政を奉還し、11月15日には京都で坂本龍馬が暗殺され、12月9日には王政復古の号令が出るという、激しく時代の移る年でありました。

高松中学、公立高松病院医学校に学び、医学、ドイツ語、漢学、数学等を修業して、15歳で東京へ遊学、東京同人社で英学等を学び、明治18年（1885）18歳で東京大学文学部へ入学、哲学、そして、教育学を学びました。卒業後、山口高等中学校教諭、高等師範学校教授等を経て、明治32年（1899）32歳のとき文部省より教育学研究のため、3年間、英仏独三国へ留学を命じられました。

開学間もない京都帝国大学は、谷本 富のこの留学に際して、彼にヨーロッパにおける文科大学の学科及び組織を取調べ、新しく設置する文科大学の構想を練るようお願いしました。今から90年前のことです。

谷本 富は、フランスで、ソルボンヌのパリ大学文科大学、コレージ・ド・フランス、また、モンペリエ大学に学び、また、ドイツのライプツヒヒ大学に学びました。

当時の文運盛んなフランスのソルボンヌでの大学公開講義などについて、次のように述べています。

“蓋此の如きは學術の興隆、智識の普及という上には最必要の事だと思われる。然るに翻って我が國既往の状態を回顧して看ると、概して大學の障壁は徒に高く、校門は永く鎖されて居るという安排で、

僅少なる學徒の外は其處に近づく事がむづかしい様である。”
 學問は人々に愛され尊敬されてこそ、文化として育つのです。彼は日本にもっと開かれた大学を創ることを考えていました。

明治35年（1902）の暮れに、英国、アメリカ合衆国を経て帰国し、高等師範学校を辞して、京都帝国大学文科大学開設のため京都へ居を移しました。明治36年（1903）春のはじめのことです。
 谷本 富はこの頃のことを次のように書いています。

“家を携えて京都に卜居したが、文科大学は容易に開設せられそうにない。……當分は理工科大学講師として、同科學生に教育學の一斑を授ける事とし、寧ろ専ら文科開設の計劃を廻らすべく力を盡した。”



谷 本 富 教 授

京都帝国大学理工科大学へ着任早々開講したその講義は、たいへんな人気を博しました。

“斯かる次第で明治36年から7年に掛けては、理工科大学の中、主として理科學生の為に「教育學の大意」を講じ、學長はじめ教官講師の傍聴する所となった。翌年には更にその規模を擴張し、法科大学の手廣な教室に於て開校する事とし、大學生一般に随意聴講を許す事としたが、題目は「教育内容の改革」として、主として固陋の旧道徳、旧思想を一洗すべく、啓蒙的に講演したから、非常の大人気で、毎回數百の聴衆押寄せ、真に立錫の地を見ずと云う程であった。その中には理工科の教官講師は勿論、他科大学の職員も多く交はり、又、高等學校や中學校、師範學校の教職にある者も、特に傍聴を乞はれたのが少なかった。”

と彼は書いています。まさに、新生の氣に満ちた京都帝国大学の面目躍如たるものがあります。

この時の谷本 富のこの講義は後に「道徳革新論」としてまとめられています、それは次のように始まっています。

“竊に推るに凡そ人生社會は變動性なり、常に動きて未だ定まらず。然かもその際に立って又習慣の固定性を逞くするあり、毎に社會の動搖に反抗すること少からず。但、最後の勝利は固より變動にあるべし。……余輩の信ずる所を敢て明言すれば、社會變動する時未だ曾て退歩はあらず、社會は動けば則ち進む。古今社會の凋落衰廢するは、唯だ其の固着不動にして停滯する際に讓さるるなり。”

さらに、

“従つて社會の改良を企つる者は、先づ何は措きても社會の固着を防がざるべからず。……元来目前の計を為す者と百年の大計を立つる者とは全然その觀る所を異にすべき筈なり。今日は世人兎に角に眼前利那にのみ意を注ぎて大觀遠觀を務めず、特に國務に執掌する者亦動もすれば年々の議會を無事通過すれば足れりとし、繃縫只だ是れ事とし、以て一時を糊塗せんとするは、余輩の與みせざる所なり。”
 そして、

“此の機會を利用して敢て道徳革新の方針を論述し、由つて以て我が國教育の内容を改善し真個國運振起の基を定めんとす。……蓋し個人活動の自由なくして、而して國家社會の隆昌を望むは、木に縁つて魚を求めるの譏あるべし。”

自由を力説強調し、自由こそ国家社会の成熟への原動力であるとし、まことに意気盛んなものがあります。

谷本 富が本学文科大学開設委員として尽力した文科大学は、日露戦争終結の翌年（明治39年）になってやっと開設されました。彼は文科大学教授として「教育学教授法」の講座を担当しました。そして、「欧州教育の進化」、「明治教化の起源」、「宗教教育原論」等を講義しました。

大正2年（1913）5月に、澤柳政太郎第5代総長が就任し、就任2ヵ月後の7月になって、帝国大学の教育改善のためとして、7人の教授に辞表の提出を求め8月に依願免本官を発令しました。この7人の教授の中の一人は谷本 富教授でありました。谷本 富はこのことを次のように書いています。

“〔文科大学は明治〕39年からいよいよ開講に決し、自分も文科大学教授に任命せられ教育学、教授法の講座を担当する事に成った。爾来その職に在る事満7年、大正2年の8月初に、病気の廉で依願免官の辞令を有難く頂戴した始末だ。”

谷本 富時に46歳でした。

今では考えられないことですが、京都帝国大学文科大学創設の功労者であり、本学の学風の形成に最も大事な時に、極めて顕著な貢献をされた谷本 富教授を本学はこのようにして失ったのであります。これは、大学の自治との関係で本学が直面した最初の大きな事件でした。

当時、法科大学では、“学問の進歩は、学問の独立を必要とする。教授は、官権の干渉と俗論の圧迫の外に立つことが必要である。”とし、“教授の任免にはあらかじめ教授会の同意を得ることを要す”との決議をしました。しかし、総長との話し合いで理解に達することが出来ず、大正3年（1914）1月、ついに連袂辞職を決定し、学生大会でも、教官の主張が容れられなければ、教官と進退を共にすると決議するに至りました。時の文部省もようやく事態を重視し、結局、教官の任免について総長と教授会との協定が差支えなく妥当であることを承認することで事件は落着きました。大学自治への一歩ではありましたが、創設以来の得がたい教授の方々を失ったことは京都大学の幹に消えない暗い年輪を残したのであります。

やがて、大正11年（1922）になり京都帝国大学は創立以来四分の一世紀を経ました。一つの成熟の段階に達しました。そして、創立25周年記念事業の一つとして、同窓生による京都大学楽友会が組織され、当時、本学工学部に着任された森田慶一先生の設計による、ヨーロッパ風の典雅な『楽友会館』が建てられました。このスパニッシュ・ミッション様式を基調とした建築が象徴するように、この頃、校庭には、“あたたかい味のある空気”が漂っていました。しかし、それも余り長くはつづかなかったのです。

総長室の壁に一枚の油絵が掛かっています。昭和18年（1943）の11月20日に、本学の運動場（農学部グラウンド）で、学生の出陣を送る式が挙行されました。その学生出陣壮行式を当時本学文学部美学の教官をしておられた須田国太郎画伯が描かれた図です。

全体に奥深い重い灰色の中、比叡山を背景にして、黒い学生服・角帽の学生の隊列が、指揮台に立てられる羽田 亨総長（第12代）の前を行進しています。学生の抜いた指揮刀と、肩にした銃身が鈍く光っています。中央にある学旗の朱色が悲壮な緊張感を表わしています。

この壮行式において、羽田総長は

「親愛なるわが出陣学生諸君。今日諸君をして、業中にして、奪然軍に赴くにいたらしめようとは。……壮き尊き命の、今日ほど軽んずべき時はないとともに、また、今日ほど重んずべき時もない。……さらば顧みなくて雄々しく征き給え。神かけて、諸子の武運の長久を祈るのである。」と述べられました。

やがて、間もなく昭和20年(1945)敗戦。京都帝国大学が京都大学と改称されたのは昭和22年(1947)10月で、本学の開学以来ちょうど半世紀が経っていました。奇しくも100年の歴史の midpoint に当ることになります。

創立25周年を記念して、同窓生が母校に寄贈した楽友会館も、敗戦の年の10月に占領軍に接収され、全館の接収が解除されて再び京都大学に帰ってきたのは、10年以上経った、昭和31年(1956)5月でした。

京都大学は年輪を重ねながら、苦しみの時を通して、建学の精神を堅持して、今日まで“学問の府”として充実し、成長してきました。世界のアカデミック・コミュニティーの中で、何処へ行っても「わが母校は京都大学なり」と誇りをもって言える大学であります。

この京都大学の真の成熟のとき、やがて7年後1997年には創立100周年を迎えようとしています。今、創立100周年に向けていろいろの計画がなされています。この1997年を中心に1994年から2000年までの7年間で京都大学の次の100年への成熟を期して、創立100周年記念事業の時期とする計画です。諸君は京大生としてその時期を迎えることになります。

諸君のこれからの充実した学生生活が、諸君の人生にとって、かけがえのない大事な輝かしいときであることは、そのまま、このときが京都大学の学風の継承と大いなる発展の輝かしい年輪となることです。そして、学問の府としての人類への使命はそこにこそあります。

諸君、自由とは厳しいものです。しかし、自由を何よりも大事にすることが、一人の人間のそして社会の真の成熟につながるとわれわれは信じます。京都大学の自由の学風の100年の成熟によって、そして、その知的営為による人類の知性への貢献によって、われわれはその証しを立てようではありませんか。そのことを、諸君と共にここに誓い合ひましょう。

参 考 文 献

『京都帝国大学』、昭和18年(1943)。

『京都大学七十年史』、昭和42年(1967)。

『京都大学—研究教育の現状と展望—(1989-1990)』、「京都大学を紹介する冊子」編集委員会、平成2年(1990)。

谷本 富；『道徳革新論』、大学講義全集第一輯、大日本図書、大正4年(1915)。

谷本 富；『欧州教育の進化』、大学講義全集第二輯、大日本図書、大正4年(1915)。

谷本 富；『宗教教育原論』、大学講義全集第三輯、大日本図書、大正5年(1916)。

『京都法学会雑誌』、第9巻、第1号、「大学教授ノ罷免ニ関スル交渉顛末」、京都法学会、大正3年(1914)。

『京都法学会雑誌』、第9巻、第2号、「大学教授ノ任免ニ関スル事件ノ経過及解決」、京都法学会、大正3年(1914)。

『澤柳全集』、第1巻、「教育学批判」、澤柳全集刊行会、大正14年(1925)。

大学院入学式における総長のことば

平成2年(1990) 4月11日

総 長 西 島 安 則

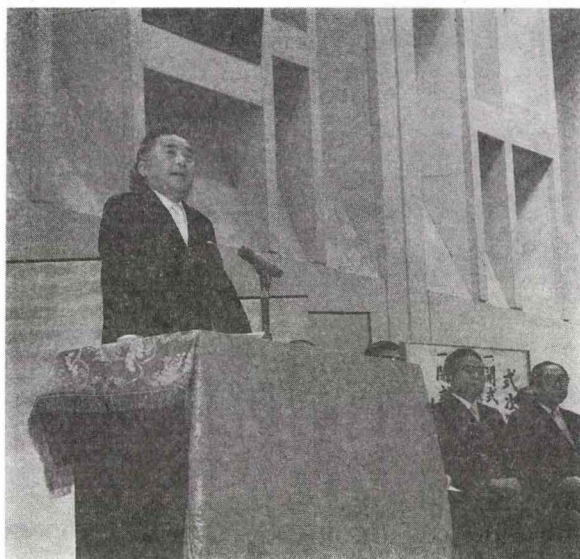
諸君、大学院研究科への入学、進学おめでとう。

本日ここに、前総長 沢田敏男先生、名誉教授の内田洋一先生、小堀 憲先生の御臨席を賜り、研究科長、部局長、教職員の皆さまとともに、平成2年度の大学院入学式を挙行し、諸君を迎えますことは、本学の最も大きな喜びであります。

大学院こそは、教育と研究が一体となり、教官と学生が研究者として、共に学び、共に研究のよろこびを分かち合える学問の場であります。

そして、大学院は、一人の研究者が志を同じく

する世界の多くの研究者と知的交流をして、共に限りなく真理に近づくよろこびを、新しいものを創り出す感激を、国を越え、文化を結んで分かち合える学問の場であります。



諸君が、学の攻究をさらに進める強い意志と情熱をもって、この度、めでたく大学院へ入学・進学されましたことは、もとより諸君のこれまでの日々の研鑽のたまものであります。また、諸君がひたすらに研究の道を進むことに対するまわりの方々の深い理解によるところも大きいと思います。この入学・進学のときに当たり、それらの方々に改めて、諸君と共に感謝したいと思います。

今年度の修士課程入学・進学者は、文学研究科72名、教育学研究科16名、法学研究科22名、経済学研究科22名、理学研究科176名、薬学研究科40名、工学研究科615名、農学研究科146名、合計1,109名であります。

また、博士後期課程入学・進学者は、文学研究科59名、教育学研究科17名、法学研究科17名、経済学研究科14名、理学研究科120名、医学研究科115名、薬学研究科20名、工学研究科95名、農学研究科74名、合計531名であります。

京都大学は、諸君を、本学の学風を共に担い、共に本学の学問の伝統を継承して、それをより深く、より高く、より広く発展させる共同研究者として、心より歓迎します。

昭和28年(1953)に京都大学に新制度による大学院が開設されて以来、京都大学大学院修士課程

修了者の平成元年度までの累計は、文学研究科2,536名、教育学研究科555名、法学研究科479名、経済学研究科442名、理学研究科3,849名、薬学研究科884名、工学研究科14,070名、農学研究科3,195名、合計26,010名となりました。

また、新制度発足以来、博士の学位取得者累計は、文学博士245(25)名、教育学博士51(6)名、法学博士90(9)名、経済学博士121(10)名、理学博士2,379(1,273)名、医学博士2,491(1,204)名、薬学博士717(297)名、工学博士3,495(1,131)名、農学博士2,227(637)名、〔()内の数字は課程博士で内数〕で総計、課程博士4,592名、論文博士7,224名、合計11,816名となりました。

これらの方々の学問の進歩へのご貢献と、現在の社会の各分野での目覚ましいご活躍は、京都大学の大きな誇りであります。

学術研究は、その水準が高ければ高いほど個性的であります。そこには研究者一人ひとりの個性が輝く独創性があります。そして、また、一人ひとりの個性が輝くとき、その深い基底にはそれぞれの文化の個性の尊さが見えます。そこにこそ、人間社会の歴史における学問の貢献があると思います。

その時代時代において、文化の華が大きく開くとき、そのはじめには必ずと言ってよいほど、文化の出会いの感激と新鮮な共感があることを知ることができます。

パスカル (Blaise Pascal, 1623~1662) は、17世紀の中頃、1646年の秋10月 彼が23歳のとき、たまたまガリレイ (Galileo Galilei, 1564~1642) の弟子トリチェリー (Evangelista Torricelli, 1608~1647) が、1644年に行った真空についての最初の実験のことを聞きました。トリチェリーはこの真空の実験を彼の師ガリレイの示唆によって始めたのですが、師の没後間もなく成功したものです。この実験のことがパスカルの自然科学者としてのその後の運命を決定したとも言われています。彼の『真空に関する新実験』から『流体の平衡に関する大実験談』、『流体の平衡について』、そして、『大気の重さについて』に至る論文にあらわれるパスカルの実験と思索の軌跡は、三百数十年経った今でも、読む者に新鮮な感動を覚えさせます。

真空あるいは、虚無ということは、17世紀においては、哲学の分野でも自然学の分野でも極めて重要な課題でした。とりわけアリストテレスの自然学を祖述する学者のあいだでは、“自然は真空を怖れており、これを絶対に許しえない”というのが通念で、真空の存在を否定していました。

パスカルは幾多の新しい実験と不断の考察を経て、次のように結論しました。

「私は以上の論文において、従来、自然が真空を避けるために生じさせるものだと考えられていたすべての現象を全般的に論じてきたのであるが、そこで私の示したことは、それらの現象がかかる想像上の原因から生じるとなすのは絶対に誤りであるということであった。

反対に私は、大気の重さこそがその唯一の真なる原因であることを、絶対に確実な理由と実験とによって示したのである。それゆえいまでは、自然のうちにあらわれるいかなる現象も、自然が真空を避けるために生じさせるものでないことは確かである。

そこから一步を進めて、自然が真空に対して何ら怖れをいだいていないということを示すのは、難しいことではないであろう。なぜなら、そういうことばの使いかたは適切ではないからである。というの

も、いま問題になっているこの造られた自然は、魂を有していないものであってみれば、それが何か感情をいただくというようなことはありえないからである。」

パスカルが、真空に関する論文のための序文として起草した『真空論序言』（1651年頃書かれたものと推定される）は、彼の死後発見されて、1779年『哲学に関する権威について』という題で発表されました。その論文の最後はつぎのように結ばれています。

「古人が自然は真空を許容しないと確信した時、彼らは彼らの試みたすべての実験において自然がそれを許容しなかったことを意味したのであり、彼らの知識のなかにはないものまでをそれに含めることは、無謀のそしりを免れなかったであろう。———

あの古代性がいかに有力であるにせよ、真理は、新しく発見されたものでも、つねにそれ以上に有力であるはずである。

というのは、真理は、それについて人々がいただくあらゆる見解よりもつねにより古いものであり、もしそれが認識されはじめた時に存在しはじめたと想像するならば、その本性を知らないことになるからである。」

学問、人間の知的営為の継承の基本はここにあると思います。

最近、大学院改革がいろいろの方面で論じられています。しかし、大学院改革への本学の基本姿勢は、

「大学院改革の方向は、あくまでも永年培われてきた本学の学問の伝統における高い水準を維持し、国際的にも最も卓越した大学院としての評価を目指すものでなければならない。」

ということであります。そして、

「大学院の存立する基調は、どの研究科にあっても、あくまでも、学術研究の推進によって、いわゆる往聖のために絶学を継ぐべき研究者の養成におかれており、その中にあって、大学および研究科の自主性のもとで、社会の多様な要請に対応しうる枠組を構築するという発想が、あらゆる大学院制度の改革において、必要であるといわねばならない」と考えられます。〔「制規等専門委員会（委員長赤井浩一教授）報告」、『京大広報』No. 372 別冊, 1989. 6. 1〕

諸君のこれからの大学院における攻究が真に実り多いものであることを期待します。

諸君の一人ひとりの充実した研究生活こそが、本学の学問の府としての存立の基盤をより強固なものとし、諸君の自由で独創的な発想こそが、本学の学術研究の将来をよりダイナミックなものにする原動力であります。

参 考 文 献

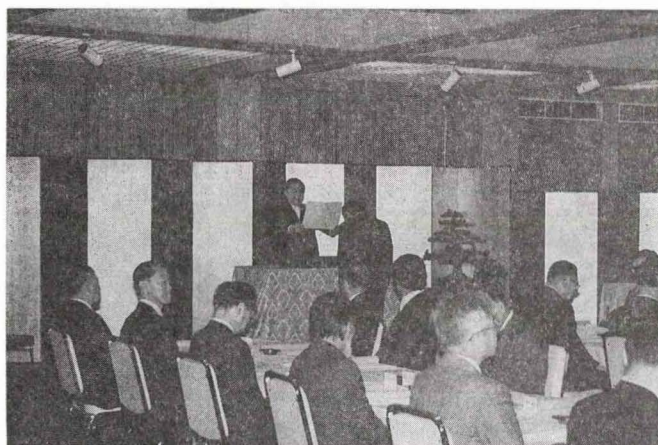
- パスカル；『科学論文集』，松浪信三郎訳，岩波文庫 33—614—1，岩波書店，1953。
『パスカル』，前田陽一編，世界の名著 29，中央公論社，昭和53年（1978）。

＜大学の動き＞

名誉教授称号授与式

4月6日(金)午前10時30分から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。授与式は、部局長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長あいさつ」があって、午前11時20分終了した。

称号を授与された方は次の54名である。(敬称略)



(氏 名) (推薦部局名)

石 原 安 雄 (防災研究所)
 森 美 郎 (工 学 部)
 木 方 洋 (教 養 部)
 吉 岡 健二郎 (文 学 部)
 伊 谷 純一郎 (アフリカ地域研究センター)
 太壽堂 鼎 (法 学 部)
 青 木 啓 治 (教 養 部)
 黒 岩 澄 雄 (理 学 部)
 小 暮 智 一 ()
 三 好 正 喜 (農 学 部)
 萩 原 宏 (工 学 部)
 山 下 律 也 (農 学 部)
 神 野 博 (工 学 部)
 熊 本 水 頼 (教 養 部)
 中 井 祥 夫 (理 学 部)
 阿 部 亮 耳 (農 学 部)
 端 恒 夫 (理 学 部)
 村 地 孝 (医 学 部)
 越 島 哲 夫 (木材研究所)
 森 田 學 (農 学 部)
 竹 腰 秀 邦 (化学研究所)
 西 島 和 彦 (基礎物理学研究所)
 寛 田 知 義 (教 養 部)
 久保寺 章 (理 学 部)
 平 井 俊 夫 (文 学 部)
 岩 井 信 之 (教 養 部)
 荒 木 辰之助 (医 学 部)

(氏 名) (推薦部局名)

赤 井 浩 一 (工 学 部)
 堀 江 正 治 (理 学 部)
 小 林 哲 也 (教育学部)
 畠 昭治郎 (理 学 部)
 石 田 政 弘 (原子炉実験所)
 藤 原 元 始 (医 学 部)
 星 野 一 正 ()
 大 塚 香 代 (教 養 部)
 山 田 正 (木材研究所)
 鍵 谷 勤 (工 学 部)
 柳 生 等 和 (教 養 部)
 大 島 清 (霊長類研究所)
 福 澤 文 雄 (工 学 部)
 永 田 雅 宜 (理 学 部)
 藤 中 雄 三 (工 学 部)
 岸 根 卓 郎 (農 学 部)
 角 谷 和 男 (木材研究所)
 川 端 昭 (工 学 部)
 武 居 有 恒 (農 学 部)
 西 村 孟 (工 学 部)
 倉 知 三 夫 ()
 櫻 井 彰 (原子エネルギー研究所)
 松 浦 邦 男 (工 学 部)
 富 岡 次 郎 (教 養 部)
 竹 内 郁 夫 (理 学 部)
 永 野 芳 郎 (教 養 部)
 石 井 米 雄 (東南アジア研究センター)

医療技術短期大学部 名誉教授称号授与式

4月7日(土)午前9時30分から、医療技術短期大学部名誉教授称号授与式が、本短期大学部会議室において挙行された。授与式は、称号授与のあと、「学長あいさつ」があって、午前9時50分に終了した。

称号を授与された方は次の2名である。(敬称略)

村 地 孝, 大 橋 ミ ツ
(医療技術短期大学部)

平成2年度医療技術短期大学部 入 学 式

4月7日(土)午前10時から、平成2年度医療技術短期大学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本短期大学部講堂において挙行された。

入学式は、学長式辞、来賓祝辞があって、午前10時40分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科80名、衛生技術学科41名、理学療法学科20名、作業療法学科20名及び専攻科助産学特別専攻20名の計181名である。

(医療技術短期大学部)

平成2年度学部入学式

4月11日(水)午前10時から、平成2年度学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」(前掲)があり、午前10時40分終了した。

今年度の新入生数は、外国人留学生15名を含め、次のとおりである。

文学部222名、教育学部68名、法学部406名、経済学部265名、理学部307名、医学部99名、薬学部89名、工学部1,048名、農学部335名、計2,839名。そのほか、第3年次に31名の編入があった。

平成2年度大学院入学式

4月11日(水)午後3時から、平成2年度大学院入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館で挙行された。

入学式は、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」(前掲)があり、午後3時30分終了した。

なお、今年度の大学院入学及び進学状況は次のとおりである。

研 究 科	修士課程	博 士 後 期 課 程	
		入 学	進 学
文学研究科	72名	10名	49名
教育学研究科	16	1	16
法学研究科	22	3	14
経済学研究科	22	4	10
理学研究科	176	14	106
医学研究科		115*	
薬学研究科	40	5	15
工学研究科	615	27	68
農学研究科	146	11	63
計	1,109	190	341

注 * は博士課程



平成2年度学部入学式

京都大学春秋講義（春季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力により、下記のとおり「京都大学春秋講義（春季講座）」を開講する。

本学教職員並びに学生については、別途30名の特別受講枠を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

記

☆月曜講義（5回シリーズ）

メインテーマ『ナチュラル・ヒストリー（自然史）と現代』

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月14日	理学部教授 日 高 敏 隆	今、なぜナチュラル・ヒストリーか
5月21日	理学部教授 鎮 西 清 高	牡蠣（かき）の自然史
5月28日	教養部教授 西 村 三 郎	生物界のあり方を求めて
6月4日	農学部教授 岩 坪 五 郎	森林の自然史
6月11日	霊長類研究所 助 手 正 高 信 男	言語のナチュラル・ヒストリー

定 員 120名

受 講 料 6,000円

会 場 京都大学時計台1階法経第二教室

時 間 午後6時30分～8時30分

申込締切日 4月25日（水）

☆水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月9日	教養部教授 佐 野 哲 郎	マザーグース・メロディーと日本のわらべうた
5月16日	工学部教授 佐佐木 綱	都市のイメージ
5月23日	教養部教授 野 田 宣 雄	歴史から見たドイツ・東欧問題
5月30日	農学部教授 小清水 弘 一	西アフリカの森と人とをつなぐ生理活性植物成分
6月6日	経済研究所 教 授 佐 和 隆 光	豊かさのゆくえ

定 員 120名

受 講 料 1講義分1,200円，5講義分6,000円

会 場 京都大学時計台1階法経第二教室

時 間 午後6時30分～8時30分

申込締切日 4月25日（水）

○ 申込方法

- ① 月曜講義、水曜講義の別々に往復はがきで下記の申込先へ申し込むこと。申込はがきには、住所・氏名・電話番号を書くこと。なお、水曜講義の場合は受講希望日を必ず書くこと。（返信はがきにも住所・氏名を必ず書くこと。）
 - ② 申込者が定員を超えた場合は、抽選により受講者を決定する。
 - ③ 受講料は、受講決定通知を受領後、郵便局の所定の振込口座へ振り込むこと。支払い後の受講料は返金しない。
- 受講資格は問わない。
- 申込先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041, 2043）

<紹 介>

防災研究所・都市施設耐震システム研究センター

都市施設耐震システム研究センターは、異なる分野間の共同による都市地震防災の研究を目的として、昭和61年4月に防災研究所の附属施設として設置された。

わが国は世界有数の地震国であり、先進工業国の中で、程度の差はあれ国土全域が地震の脅威下にあるような国は他に例を見ない。従って、地震防災はわが国では重要な社会的課題であり、近代科学の理学的・工学的基礎に支えられた地震防災の研究は、常に世界をリードしつつ歩んできた。

地震防災の課題領域はきわめて多岐にわたる。その内容は、①地震の発生メカニズムと地盤震動・地盤変状や津波などを含む、いわゆる地震ハザードの問題、②種々の構造物や建物・施設の地震時挙動と破壊性状を明らかにする耐震構造論、③都市機能を支える供給・処理施設や通信・交通施設などのネットワーク・システムの地震時信頼度と復旧問題を扱うライフライン地震工学、④地震後の火災やコンビナート等における複合災害の問題を扱う被害波及の研究、⑤地震時の避難・救援問題を含む、情報伝達・人間行動など、情報学・行動科学的側面の研究、⑥地域の地震防災計画の策定・実行のための地域計画的な研究などを挙げることができる。これらの諸分野の発展過程はさまざまで、①、②のように既に長い研究の歴史と豊富な技術的蓄積を有する分野、③、④のように、過去10～20年で急速に体系化された分野、⑤、⑥のように先駆的研究はあったものの、最近

になって研究領域として確立されたものがある。

こうした多様な研究領域における個々の成果は重要であるが、これらを総合的に地震防災対策へと結実させるためには、それらを有機的に結合するためのシステム論的な方法論の研究が必要である。しかも、それは個々のハードな面に立脚した実現可能性の高い方法の開発でなければならない。ここに、上記の各分野の専門家の間での共同研究と協力の必要性が生まれる。当センターは、こうした共同研究の場とすることを目的として設置されたものである。

当センターは、専任教員4名と客員教員2名により構成されている。専任教員は土木工学、建築学、応用地震学の専門家で、従来それぞれの分野で個別に進められてきた都市地震防災の研究を、共通の目的意識のもとで協力して実施している。また、客員教員はそれぞれの本務を持ちながら、専任教員と協力して重点課題に関する研究を行っている。

当センターが対象とする研究領域を、図1のブロック・ダイアグラムに示した。ここでは、都市耐震問題を物理的な側面（施設や建物などの破壊に対する安全性：構造工学的研究）、機能的な側面（水、電気、交通・通信などの都市機能の保持：システム工学的研究）及び社会的な側面（人の動き、情報災害、地震被害の経済的影響：人文・社会科学的研究）に分けて考え、それぞれの現象の解明とともに、それらを統合するための総合的な研究を行っている。それらを列挙すると以下のとおりである。

- (1) 都市地盤の強震特性に関する研究（地震時の地盤の揺れ方）

- (2) 都市空間の耐震化に関する研究（建物群、地下街などの安全性）
- (3) ライフライン系の耐震化に関する研究（ガス、水道、電力、交通・通信網）
- (4) 地震後の2次災害軽減対策に関する研究（火災、複合被害）
- (5) 都市震害に関する人文・社会学的研究（災害時の人間行動、経済的影響）
- (6) 都市震害に関するデータベースの整備（都市耐震の共同研究の場の構築）

当センターは設置後4年を経過し、上記の研究目標に沿った研究活動も軌道に乗ったところである。「共同研究」は口にするのはたやすいが、現実にはそれに携わる研究者の間のコミュニケーションと切磋琢磨によほどの努力がないと、単なる寄合い所帯となる危険を常に抱えている。幸い、メンバーそれぞれの努力により、こうした問題を克服して新しい研究の場が形成されつつある。

また、当センターでは国際的な研究協

力の発展にも力を入れており、現在米国カリフォルニア州のパークフィールドで日米共同地震観測（表紙写真）を行うとともに、昨年10月に発生したロマ・プリエタ地震によるサンフランシスコ湾岸地域の被害とその発生機構について、米国地質調査所と共同で観測・研究活動を展開している。

（防災研究所）

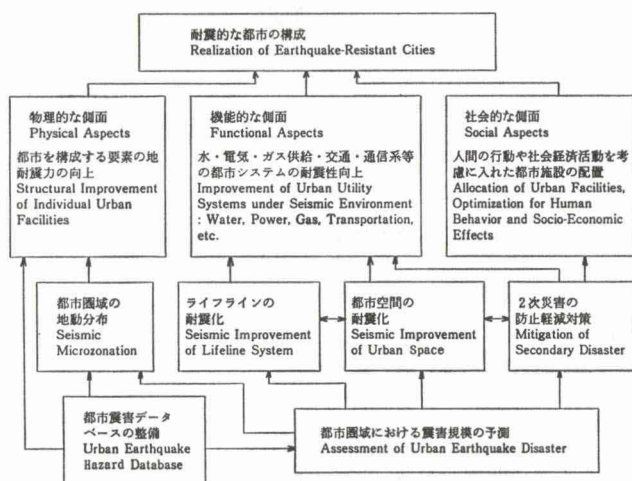


図-1 都市震害の予知と防止システム確立のシナリオ

<資 料>

平成元年度京都大学後援会助成金交付者

京都大学後援会助成事業検討委員会で決定した平成元年度第1類（国際交流事業関係）助成金交付者は、第1類第1種（海外派遣研究員）24名、第2種（海外からの学者招へい）15名、第4種（大学行政上の渡航）8名及び第4種（大学間協定校との交流）1名で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1類第1種

本学教官が、専攻する学問分野等について調査、研究のため海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当、宿泊料）を交付するもので、派遣区分は、6か月、3か月、1か月、若手研究者（概ね1年）がある。

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国	研究題目
6か月	工学部	助手	間瀬 肇	アメリカ合衆国, オランダ	防波堤に作用する揚圧力及び周辺地盤の波浪応答に関する研究
	農学部	講師	林 勇夫	アメリカ合衆国	多毛環虫類の形態学的研究
	人文科学研究所	教授	阪上 孝	フランス	文化革命としてのフランス革命の研究
3か月	教育学部	教授	高木 英明	アメリカ合衆国, 連合王国, フランス, イタリア, ドイツ連邦共和国	大学の設置形態とその法的地位に関する比較研究
	理学部	助手	稲葉 カヨ	アメリカ合衆国, ドイツ連邦共和国, オーストリア, スイス	樹状細胞の分化と機能に関する研究

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国	研究題目
3か月	教養部	助教授	山口 裕	ドイツ連邦共和国, スイス, ドイツ民主共和国	ハインリヒ・マン研究
	ヘリオトロン核融合研究センター	助手	水内 亨	ドイツ連邦共和国	ヴェンデルシュタイン 7-AS (W7-AS) 装置における周辺プラズマの実験的研究
1か月	文学部	助手	狩野 恭	オーストリア	国際会議 (International Dhurmakirti Conferense) 出席及びインド論理学認識論に関する各国の研究成果, 出版についての Bibliography 作成プロジェクト参加・研究
	経済学部	教授	中村 哲	アメリカ合衆国, メキシコ	アメリカ, メキシコにおける近代日本研究
	経済学部	教授	池上 惇	オーストリア	オーストリアを中心とした土地税制の国際比較
	理学部	助手	戸田 幹人	フランス	Les Houches の夏の学校への参加 (題名: カオスと量子論) 及び研究調査
	理学部	助教授	大須賀 篤弘	アメリカ合衆国	光合成モデル機能性ポルフィリンの合成と光化学ゴードン会議 (有機光化学) 出席及び研究調査
	医学部	教授	星野 一正	アメリカ合衆国, カナダ	北米における生命倫理の現状視察
	医学部	講師	中山 宏太郎	連合王国	精神医学に関する研究調査
	医学部	助教授	芹川 忠夫	アメリカ合衆国	米国実験動物学会出席並びにモデル動物に関する研究調査
	工学部	助手	森 康維	オランダ, ドイツ連邦共和国	超微粒子の粒径測定に関する研究調査
	農学部	教授	西村 博行	ハンガリー, ドイツ連邦共和国, スウェーデン, 連合王国, アメリカ合衆国	農地価格形成に関する農業計算学的研究
	教養部	助教授	西井 正弘	連合王国, フランス, ドイツ連邦共和国, オランダ, スイス	国際テロリズムの法的研究 (欧州の実態調査と研究)
	原子エネルギー研究所	助教授	吉川 潔	ポーランド, ドイツ連邦共和国	高効率直接エネルギー変換に関する研究調査
	ウイルス研究所	教授	伊藤 嘉明	連合王国	第6回王立がん研究基金 (ICRF) DNA 腫瘍ウイルス学会に出席 (発表) 及び研究調査
若手研究者	放射性同位元素総合センター	助手	斎藤 和實	アメリカ合衆国, カナダ	高等植物における L-アスコルビン酸生成に関する研究
	法学部	助教授	前田 雅弘	アメリカ合衆国	投下資本回収制度の理論と実際
	食糧科学研究所	助手	松村 康生	連合王国	エマルション系の理論的解析と食品への応用に関する研究
	大型計算機センター	助教授	大西 淳	アメリカ合衆国	高度計算機ソフトウェアの開発技法に関する研究

2. 第1類第2種

海外から学者を本学に招へいし、講義、研究指導等を依頼してその分野の研究発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金 (往復航空賃及び滞在費) を交付するもので、招へい期間は原則として1～3か月 (一般) 及び1年以内 (若手研究者) である。

区分	受入部局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研究題目
一般	教育学部	金 仁 會	大韓民国・延世大学校教育科学大学教授兼学長	教育哲学 韓国巫俗と教育哲学
	理学部	Chen Hai	中華人民共和国・中国科学院地質研究所研究員	テクトロニクス・地球化学 中国東北部の大陸性マントルの地球化学的構造
	理学部	James R. Holton	アメリカ合衆国・ワシントン大学大気科学科教授	気象学 中層大気力学と物質輸送に関する研究
	工学部	Gad Hetsroni	アメリカ合衆国・カリフォルニア大学サンタバーバラ校化学・原子力工学科客員教授	沸騰熱伝達, 混相乱流 混相乱流とダイナミクスに関する研究

区 分	受 入 部 局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
一 般	工 学 部	張 訓 械	中華人民共和国・中国科学院武漢物理研究所教授	電離層物理学 下部電離層の構造に関する研究
	工 学 部	Joseph A. C. Humphrey	アメリカ合衆国・カリフォルニア大学バークレイ校教授	流体熱工学 計算機支援形実験法に関する研究
	工 学 部	Suh, Byung Suhl	大韓民国・漢陽大学校教授	制御工学 非最小位相系のロバスト制御
	教 養 部	Durica Krstic	ユーゴスラビア・セルビア学術アカデミー教授	法政史 慣習法・比較法研究
	教 養 部	Helen H. Vendler	アメリカ合衆国・ハーヴァード大学教授	英米文学 英米詩
	防 災 研 究 所	Paul Southworth Symonds	アメリカ合衆国・ブラウン大学教授	応用力学 塑性構造物の動的挙動
	霊長類研究所	王 岐 山	中華人民共和国・安徽大学教授	哺乳類生態学 マカカ族の比較生態学的研究
若 手 研究者	超高層電波研究センター	Bruce T. Tsurutani	アメリカ合衆国・カリフォルニア工科大学ジェット推進研究所シニア研究員	宇宙プラズマ物理学 彗星付近の非線形プラズマ波動の研究
	医 学 部	Zhang Xio Min	中華人民共和国・北京医科大学第3病院講師	皮膚病学 皮膚肉芽腫症及び癩の免疫組織学的研究
	教 養 部	John Constable	連合王国・ケンブリッジ大学モドレン・カレッジ研究員	英文学 (風刺文学, 批評) 「批評家 I. A. リチャーズの書簡集の編集と研究」
	数理解析研究所	Nguyen Tien Dai	ベトナム・ハノイ数学研究所助教授	数学 特異点とホロノミック微分方程式系の研究

3. 第1類第4種

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたものの外国出張に対し、助成金を交付するものである。

所 属・職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
教 育 学 部 教 授	河 合 隼 雄	平成 元. 5. 1～元. 5. 30	スイス国における学生の精神的健康・青年期の心理に関する研究体制及び施設等の実情調査
経 理 部 主 計 課 課 長 補 佐	吉 村 恭 三	元. 11. 21～元. 12. 2	タイ、シンガポール、インドネシアを訪問し、各国の学術研究機関の財政制度及び施設等の実情について調査し、併せて本学東南アジア研究センター現地連絡事務所の管理・運営状況視察
総 長	西 島 安 則	元. 11. 29～元. 12. 6	ノルウェーフルブライトプログラム40周年記念教育者会議に出席並びにノルウェーの高等教育・研究機関の実情調査
庶 務 部 広 報 調 査 課 調 査 掛 長	勝 見 治	元. 11. 29～元. 12. 6	京都大学総長に随同行してノルウェーの高等教育・研究機関を訪問し、各機関の広報・調査統計システムの実情等について調査
総 長	西 島 安 則	2. 1. 30～ 2. 2. 11	ワールド・エコノミック・フォーラム・ダボス会議出席並びにスイス連邦における高等教育・研究機関の実情調査
庶 務 部 庶 務 課 秘 書 掛 長	小 坂 吉 美	2. 1. 30～ 2. 2. 11	京都大学総長に随行し、ワールド・エコノミック・フォーラム・ダボス会議出席並びにスイス連邦における高等教育・研究機関の実情調査
教 養 部 教 授	寛 田 知 義	2. 3. 4～ 2. 3. 12	ドイツ連邦共和国、連合王国における高等教育の比較研究並びに教育研究施設の視察
庶 務 部 国 際 交 流 課 第 三 渉 外 掛 員	西 村 幸 江	2. 3. 4～ 2. 3. 12	ドイツ連邦共和国、連合王国の高等教育・研究機関における国際交流の実情並びに外国人の受入れ体制等の状況調査

大学間協定校（当分の間バリ第7大学に限る）との交流により学者を受入れる場合に助成金（滞在費）を交付するものである。

受 入 部 局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
ウイルス研究所	Patrick Hughes	フランス・パリ第7大学 生化学主任研究員	生化学、分子生物学 大腸菌染色体複製起点における転写の研究

